
探偵対怪盗

空風灰戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵対怪盗

【Zコード】

Z6020E

【作者名】

空風灰戸

【あらすじ】

西山探偵事務所に、彩菜の最初の事件で出会った新次がやってくる。彼は探偵事務所への勤務を希望し、何とか勤務することとなる。そんなころ、一人の依頼人がやってきて、怪盗シーファンという怪盗から家宝を守ってくれと依頼される。

探偵の西山彩菜が初めて手がけた事件が解決してから一週間がたち、都心部から少し離れた場所に構えている西山探偵事務所は新年を迎えていた。しかし、新年も数日たつたが事務所に依頼が舞い込むことはなくやはり彩菜は退屈していたのだった。

そんなある日、事務所の中にチャイムが響き渡った。彩菜がドアを開くとそこにはやせぎみの背の高い黒髪の男がそこに立っていた。

「お久しぶりです、探偵さん」彩菜の姿を見るなり男は言った。

「あら、あなたはこないだの事件の　辻風君でしたつけ？」

「はい、辻風新次です」

彩菜は彼を中のソファに勧めそこで話すことにした。

「ところで今日は依頼でも？」彩菜は訊いた。

「いえ、依頼するほど金は持つてませんよ。フリーターですからね。実はそのフリーターを卒業したいんですよ」

新次はまだ話を続けるつもりだったようだが、彩菜がそこでそれをさえぎった。

「つまり、ここで働きたいわけですか？　ほら、あなた探偵に興味があるようだつたし」

「すばりそのとおりです。さすがですね」

「それは無理よ」彩菜は彼の言葉を無視していった。「恥ずかしいことに最近じゃ依頼はめつきり少なくて人を雇えるほどのお金はないのよ。別の所をあたつてもらえる？」

その言葉を待つていたかのように新次は少し笑みをこぼし言つた。

「いえ、実はそんなことだらうと思いましてちゃんとプランを考えてきてるんですよ」

「プラン？」彩菜は少しむつとして訊き返した。

「はい。俺はフリーターで金がないにもかかわらず、パソコンとインターネットの接続環境だけは整つていましてね。ここに来る前に

いろいろこの事務所のことを調べていたんですよ。その時、この事務所にはホームページがないことを知ったんですよ

「じゃあ」と彩菜は口を挟んだ。「この事務所のホームページを作ったから雇ってくれってことかしら?」

「そう言つことです。ホームページを作れば、日本の名探偵である西山乱夢探偵がいた事務所です少しは依頼が増えることだと思いますよ」

「確かにホームページを作れば依頼が増えたという話しさよく聞くけど、本当に依頼が来るまでになるかしら?」

「なりますよ」新次は得意げに言つた。「数々の企業がホームページを作つて仕事が増えたつていうデータもあるわけですし「いいんじやない」と、不意に一人の耳に第三者の声が入つてきた。

「お母さん」と彩菜は言つた。

彩菜の母、西山鈴代は五十代の女性でメガネをかけている西山探偵事務所の経営者である。乱夢と共に経営をしているのだが、乱夢がロンドンへ渡つているから鈴代一人で経営をしている。

「ホームページで依頼が増えるものならまたとないチャンスじゃない」

「でも、本当になるかどうか」

「あなたお名前はなんというの?」

鈴代は新次に訊ねた。新次は自己紹介をした。

「辻風君、ホームページを作つてくださるかしら?」

「はい、ぜひともやらさせていただきます」

「じゃあ、今日から早速作つて頂戴。パソコンは彩菜のものを使うといいわ」

「お母さん!」彩菜は言いながら立ち上がつた。

「まあまあ怒らないの、彩菜。ただし、条件があるんだけどいいかしら?」

「条件ですか?」

「ええ。もしホームページを作つて依頼がなかつたらあなたのお給

料はお払いできませんよ。」ちらりもお金がなくて困っているんですね

からね」

「いいでしょ」「新次は強気で言い返した。「それでここに勤めさせてもらえるなら」

「そう、じゃあお願ひしますね、辻風君。彩菜それでいいわね?」「ダメといつても押し通すんでしょう? だったら無駄な時間を使うだけだわ」

「じゃあ決定ね。さあ、辻風君。早速お願ひね」

「はい」

「やつぱり」新次が椅子に座りパソコンを使い始めるとき彩菜はつぶやいた。「決定権はお母さんが握ってるのね」

新次がやつてきてから数週間がたち彩菜は大学の講義が始まり事務所を留守にすることが多くなった。新次は自分のパソコンを持つてきて探偵事務所のホームページを作ることになり、彩菜のパソコンは無事に彩菜の手に戻った。それはよかったです。結局依頼はこないままだった。

だが、一月の金曜日に待望の依頼が舞い込んだ。

その日、彩菜が大学から帰つてくると事務所の接客用ソファに中年の男性が座つていた。

「あ、お帰り彩菜。こちら依頼者の方だよ」

新次は彩菜の姿をみるとそういった。ここ一ヶ月で彩菜に対する言葉は普段の話し方と同じになり、敬語で「人が話すことはなくなりました。依頼がなければ新次と共にいる時間は増えたし、敬語で話すのは面倒だという二人の考え方からそうなったのだった。

さて、依頼人は中年にしては白髪が少なくきれいなスーツをきて紳士のように思えた。

彩菜が相手の反対側のソファに座ると言つた。

「どういづこ依頼でしょつか?」

「わたしは川上豊と申します。実は昨日、この手紙がわたしの家の

ポストに入っていたのです

川上はそういうとポケットから一枚の手紙を取り出した。それに
はこうかかれていた。

次の日曜日午後十時にあなたが持っているエメラルドスターを頂
戴に参上する。

怪盗シーファン

「警察には行つたのですか？」

それを読み終えると手紙を返しながら彩菜は訊いた。

「行きました。しかし、この怪盗シーファンという怪盗は今まで警
察の名にあがつたことがないのであまり警備員が来てくれないので
す。だから、こうして探偵さんにも護衛を頼もうと思いまして」

「それでは怪盗シーファンといつのは新しい怪盗ということですか
？」

「そういうことだそうです」

「いいでしょ、依頼をお受けいたします。ところで、エメラルド
スターというのはなんなのでしょうか？」

「わたしの家は昔から豊かであるとはいえなかつたのですが、代々
エメラルドスターと呼ばれる宝石が伝わつてゐるのです。何でも完
全にエメラルドでできており、希少価値は何千億円もするとか」

「何千億円！」新次は思わず叫んでしまつた。だが、それを無視し
て彩菜はいった。

「それは怪盗が狙うわけですね。セキュリティ面はどうなんじょ
うか？」

「防弾ガラスでできたガラスケースに入れているだけです。今まで
このエメラルドスターのことを話したことはなく、誰もこんなもの
があることを知らなかつたのですからたいしたセキュリティはして
いなかつたのです」

「なるほど。では、明日の午後にお宅へお伺いすることにいたしま
すので、こちらに住所をお書きください」

彩菜はメモ用紙を机から取り相手の住所を書かせた。書かせ終わ

ると今日は帰つていいといい依頼人は事務所を後にした。

新次は依頼人が後にしてから言った。

「いまだき怪盗なんて珍しいものだ！ 怪盗なんて小説やアニメの中のものだけだとばかり思つてたのに」

「実際、石川五右衛門とか大泥棒はいたから小説の中だけとは限らないと思つけどね。さて、私はレポートを書かなくちゃ。これがかけなきや明日行けないもの」

翌日に川上の自宅へ彩菜と新次が訪問すると、警備員がすでに数名たつており彼女らが入るのを拒まれた。しかし、川上本人が通してよいと許可をしたため彼らは入ることができた。

「もう、警備員は来ているんですね」と新次は言った。

「はい。警察の名誉を守るためだとは思いますが、なんせ、無名の怪盗でも盗まれたら警察の顔がたちませんからね」

「そんなものよ、警察なんて」彩菜は小さくつぶやいた。

川上の家は中古の一戸建ての一階付きで一般家庭の一戸建てより少し小さい家だった。なるほど、こんな家に数千億円の価値を持つ宝石があるとは到底思えない。むしろ、本当にこんな家にそんな宝石があるのかと疑いたくなるほどだった。

川上に案内され二人は小さな書斎に通された。その書斎は一階にあり窓は一つしかなくベランダはない。窓からは大きそうな木の姿が見える。真ん中にはガラスケースに入れられたエメラルドがある。それは防弾ガラスの中にあるにもかかわらず綺麗に輝き、防弾ガラスを取ればさらに綺麗に輝いているのだと彩菜は思った。ガラスの周りには二名ほど警官が警備にあたっていた。

「入れる場所はこのドアと窓なんですね？」新次は川上に尋ねた。

「そうです。屋根裏部屋はこの部屋にはつながっていないので天井からの進入はまず無理でしょうし」

「宝石はもともとの部屋に置いてあつたのですか？」今度は彩菜が尋ねた。

「いえ、普段は宝石箱に入れているのでここにはありません。宝石箱といつてもエメラルドスターしか入れていませんし、取られてもわかりにくいということから急遽ガラスケースに入れて外に出しています。怪盗シーアンも宝石箱にあることを知っているでしょ うからそつちに手をかけるだらうと思つてます。

それにこのエメラルドスターの輝きがすばらしいので、これからは書斎にこうして飾つておきたいと思つてますよ」

「そうですか。しかし、宝石箱に入れておいたほうがいいと思いますよ。宝石箱に鍵をかけ引き出しにも鍵をかければ取られる可能性は低くなると思います」

「ですが、それだと怪盗シーアンがあらかじめ鍵を用意しておけばたやすいでしょ。警備員がこのようにしてやつたほうが確かだとわたしは思います。それに書斎を選んだのは本棚とかが邪魔になるからで、ちゃんとしたセキュリティ完備はしてあるんです」

「しかし」

「警備に関しては万全です。西山さんは怪盗シーアンがどこから来るかなどの対策をしていただければいいのです。さて、他の部屋にご案内しましょう」

彩菜は不快だつた。「所詮、自分のような探偵をこの人は信じていないので」と知つたからだつた。何もかも自分の作ったセキュリティが安全だと思い込んでいた。しかし、依頼は依頼であるしやるべきことはやらねばならない。他の部屋に案内してもらつことだけはした。

全体を回つて彩菜が知つたことは他の部屋からや屋根裏部屋から書斎に通じていないということだけだつた。つまり、書斎の出入り口は一つ 窓と入り口のドア だけだというのを裏づけただけだつた。

「では、わたしは少しやることがありますので一いつかへとお休みになられでください」

川上はリビングに一人を残しどこかへと行つてしまつた。川上が

出て行くと新次は言った。

「どうやら、書斎は安全なようですね。入れる一箇所をちゃんと見張りさえすれば外部から進入することはできないし」

「安全ではないと思うわ。例えば、机の下に隠れるとか本棚の後ろに隠れることはできるもの。むしろ、何もない部屋のほうが安全性は高いと思うわ。まあ、そんなとこに隠れた怪盗なんてのはいないでけど。怪盗って華麗にものを盗んで行くんだものね」

「じゃあ、どうやって盗んでいくんでしょう?」

「私が考える限り、変装して部屋に堂々と入り込み盗むと思うんだけど誰に変装するかよね。まあ、それは入るときに変装チェックをすれば問題ないことだけど」

「なんと簡単な事件なんだろ?」新次はため息をついていった。「もつとはらはらした事件がよかつたのになあ」

「事件をそういう風にみない。小説の中じゃないんだからね。さて、もうやることもないようだし私たちは事務所に帰ることにしましょうよ。犯行は明日なんだからね」

翌日午後三時ごろに彩菜と新次は川上の家へと再度訪れた。昨日よりも警官が増えており、厳戒態勢に入っている雰囲気だった。犯行まであと七時間……怪盗シーファンがもしかしたらすでにこの中にいるかもしれないのだ。だが、家に入るときは変装チェックが行われ彩菜と新次もその例外ではなかつた。

「もう、顔を引っ張るなんて最低!」

彩菜は変装チェックが終わるとぼやいた。

新次も変装チェックを潜り抜け家の中に入ると川上が出迎えてくれた。その表情は緊張しているようで落ち着きがなかつた。彼は一人を書斎へと連れて行き、書斎の警備状況について彩菜に尋ねた。書斎の警備状況は完璧だつた。窓には一人の警官が配備されガラスケースの四方にも警官が一人ずつ配備されている。ドアの横にも警官が一人配置され、他に刑事が三名ほどいた。

その刑事と彩菜の視線が会うと刑事は言った。

「あんたが探偵か。悪いがここは探偵のやる仕事じゃない。帰つたほうがいいと思いますがね」

彩菜はその言葉に不快だつたが、平然と返答した。

「あら、それは刑事さんも同じじゃないですか？ 最近、怪盗なんて泥棒はでませんからね。刑事さんたちだけで捕まえられるとは限りませんよ」

「この警備体制でわれわれ三人も刑事がいれば怪盗シーファンなどという聞いたこともない怪盗がこの宝石を盗めるわけがあるまい。探偵はいるだけ無駄だ」

「まあ、それは後々はっきりするでしょう。ところで、川上さん。まだ時間はありますし家の中の警備体制をみせていただけませんか？」

川上は同意し、書斎を後にして残りの部屋を行つた。残りの部屋の警備はたいしたことなく各部屋に一人ずつ廊下には一人ずついるだけだつた。バスルームやキッチンなどの場所には配備されていなかつた。部屋の窓から庭にも警官が一名配置されているのが彩菜にはわかつた。

そこをみるとやはり再度リビングで彩菜と新次は時間まで休憩することにし、川上は書斎へと戻つた。

「怪盗シーファンはつかまりそうですか？」新次は尋ねた。

「まあ、警備体制は万全だと思うわ。でも、怪盗シーファンの初仕事みたいなわけだしどんな手口でやつてくるかがわからないからなんともいえないわ。変装して盗みだすにしても変装チエックをやつてるし。それにしてもあの変装チエックって最低ね！ 思いつきり顔を引つ張るんだもの 私にも容赦なくね」

「宝石が盗み出されたら大変ですから、女性も男性も変わらないんですねよ」

「だからつても少しやさしくはできないのかしらね」怒つたように彩菜は言った。

「それよりどうなんですか、怪盗シーファンの逮捕については。何

か対策でもあるんですか？」

「きたときを捕まえるしかないわね。そうだ、ブレーカーのところに警官を配置させるように言つたほうがいいわね。ブレーカーを落として暗い中で盗むつてよくある話しだし」

彩菜はそのことを一人の警官に伝え、ブレーカーの位置に一人警官がつくことになった。ブレーカーは玄関にあつた

夜に入り午後十時二十分前だ。彩菜と新次は書斎で刑事三人と警官たちと共に緊張の面持ちで時を待つていた。

「川上さんはどうしたんでしょうかね？」緊張した空氣の中新次はひそひそ声で彩菜に訊いた。

「宝石が盗まれる瞬間をみたくないからこないのかも 私にはわからぬけど」

それから十分たつとあまりの緊張した空氣にトイレに行きたくなつたといい新次は書斎を後にした。

さらに五分たつと書斎のドアが開いた。彩菜は新次だと思つていたがそれは意外にも川上だつた。

「悪いね、トイレにいたもんだから」

午後十時一分前。書斎内の空氣に緊張が走り、室内にいる人たちはみな緊張面になつてゐる。どこから怪盗シーファンは現れるのか？ そしてどうやつてエメラルドスターを盗むのか……。彩菜は辺りを見回しながら考えていた。

午後十時！ ……書斎内は沈黙したままだ。一秒一秒が流れて行きついに一分たつても何も起こらなかつた。エメラルドスターはガラスケースに入れられたままでその輝きは最初にみたときと同じ本物だ。

「なんだ、いたずらだつたのか」緊張がとけてきた空氣の中で川上は言つた。「これで安心だ。いやあ、『苦労様でした警察の方々。あの予告状はどうやらいだずらだつたようですね』

「しかし、怪盗とは予告状を出したからには必ずでも宝石は手に入れるはずです」と彩菜。

「ふん、この警備の厳重さに盗むに盗めなかつたんだよ。そんなこともわからないのか探偵さんよ」刑事の一人がいやみたつぶりに言った。「よし、じゃあ帰るとするか」

刑事と警官たちは続々と書斎を後にして行つたが彩菜は書斎に残つていた。

「どうしたんですか？　あなたは帰らないんですか？」警察たちがいなくなると川上は言った。

「ええ、新次がこないと帰れないんですよ。まつたく、いつまで私を待たせるつもりなのかしら」

「まあまあ。さて、わたしはこの宝石を宝石箱に戻す」としましょうかな。無事に宝石は取られなかつたわけですしね」

川上はそういうとガラスケースを取りエメラルドスターを手に取つた。彩菜はその光景をみてふつとこの家に来たときに川上が言つていた言葉を思い出した。

「ちょっと待つてください」

川上がエメラルドスターを手に取り部屋を出ようとドアに近づいているとき彩菜は川上の前に立ち言った。

「川上さん、あなた言いましたよね。『このエメラルドスターの輝きがすばらしいので、これからは書斎にこうして飾つておきたいと思つていますよ』と。あなたいまそれを宝石箱に戻すといつましたよね？　どういうわけですか？」

川上の顔に一瞬戸惑いの表情が浮かんだと彩菜は思つたが、それが本当かどうかわからないほど一瞬のものだつた。川上は平然と言つた。

「気が変わつたんですよ。ここに警備なしにおいておくとやはり危険ですからね。宝石箱に戻そうと思つてはいるんです」

「そうでしたか。しかし、ちょっとあなたの顔をひっぱらせていただけませんか？」　『宝石をお守りした報酬の代わりとして』

彩菜がそういうと川上は笑い出した。

「この男がそんなことを言つていたのか」と川上は言った。「それ

は聞き落としていたな。やはりもう少し入念にことを調べておくべきだつたよ。君のその要求については同意できないよ。そんなことをしたらわたしの素性がばれるだけだ

「じゃあやはりあなたが怪盗シーファン……。本物の川上さんはどうしたの？」

「トイレで寝ているよ、君の相棒と一緒にね」

「なるほど。あなたはトイレで本物の川上さんと入れ替わり、そのときにはばつたりと新次に会つてしまつた。その場で新次を氣絶させたとまあこんな感じかしらね」

「いかにも。まあ、素顔がみられたわけではないのは運がよかつたがな。さて、ではこれで失礼することにしよう。西山探偵、あなたのその注意深さには敬意を表するが俺を捕まえることはできない」

怪盗シーファンはそういうと煙花火に火をつけ辺りに煙を充満させ始めた。

「さらばだ、西山探偵」

「待ちなさい！」

彩菜は辺りが見えないにもかかわらず手探りで怪盗シーファンを探した。だが、見つからず窓が開く音と共に煙がそこから逃げ出して行つた。彩菜は窓に駆け寄り外をのぞいた。しかし、そこに怪盗シーファンの姿はなかつた。

「取り逃がしたようね……」

怪盗シーファンを取り逃がした彩菜はトイレに向かつた。怪盗シーファンが言つたとおりそこには川上と新次が倒れていた。彼女は二人をゆすつて起こした。すると、新次はすぐおきた。

「大丈夫？」彩菜は声をかけた。

「あれ、彩菜。こんなところにいて大丈夫なのか？」

「もう十時はとっくに過ぎて警察も帰つたわよ エメラルドスターはきれいに盗まれちゃつたけどね。まあ、そのことについては事務所に帰つてから話してあげるわ。それより川上さんを起こすのが先よ。なんで、よりによつて新次からおきるのかがわからなかつた

わ

このとき彩菜はあることに気がついた。新次の髪が乱れているのだ。まるで激しい運動をしたかのようだ。彩菜はそのことに触れると新次はいった。

「階段を急いでおりたからな。ほら、十時まであんまり時間なかつたし

「そつか。ならいいんだけど」

彩菜は川上を起こし事の次第を告げ、事務所に戻った。この事件の失敗はとても悔しいものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6020e/>

探偵対怪盗

2010年10月8日15時14分発行